

西欧中世文書の史料論的研究：平成23年度研究成果 年次報告書

岡崎，敦
九州大学大学院人文科学研究院：助教授

ドリュモー，ジャン＝ピエール
レンヌ第2大学：元教授

高橋，一樹
国立歴史民俗博物館：准教授

城戸，照子
大分大学経済学部：教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/1932630>

出版情報：2012-03
バージョン：
権利関係：

2. 「西洋中世史料論研究の射程」研究会

日程：2011年12月17日（土）13時30分から

18日（日）9時30分から

会場：九州大学箱崎文系キャンパス内 共同演習室

報告：

小澤 実「紀元千年期スカンディナヴィア史料論に向けて
—デンマーク・イエリング朝の事例より—」

足立 孝「12・13世紀ウエスカ司教座聖堂教会文書の生成論 —俗人文書と家門の創造—」

新井由紀夫「15世紀イングランドにおけるジェントリの家政会計記録（ハウスホールド・アカウント）について —ラングレイ家の家政会計記録（1473年）を中心に—」

岡崎 敦「現代アーカイブズ理論と西洋中世史料論研究」

山田雅彦「中世都市の民間契約の掌握・管理に関する記録作成」

徳橋 曜「ラテン語で書くか俗語で書くか

—14～15世紀のフィレンツェ共和国の文書作成—」

西欧中世史料論研究会では、4年間にわたり、科学研究費補助金の助成を受けながら、共同研究を続けてきたが、最終年度にあたり、総括の研究会を開催した。

今回の研究会では、全体テーマを「西洋中世史料論研究の射程」と題し、6本の研究報告が行われた。共同研究の中核を担う研究者に加えて、今回、お二人のゲストを招聘した。小澤実氏は、北欧史研究刷新の先頭におたちの若手研究者だが、専門分野にとらわれない該博な知識に加え、とりわけ方法論について鋭い意識をお持ちである。新井由紀夫氏は、イングランド中世史、とりわけジェントリ資料の史料論研究の第一人者として知られる。社会史研究に対して、史料学的な分析がいかに大きな貢献をもたらすかを示してこられた。二日間にわたる研究会を通して、西洋中世史料論研究の問題関心や方法論の広がりを実感するものとなった。

ここでは、研究会終了後、報告者の方々に、あらためて寄稿いただいた原稿を掲載した。また、最後に、共同研究グループの最長老である丹下栄氏に、今回の研究会、さらには「史料論研究会」全般に関するコメントをお寄せいただいた。共同研究全体の総括として、あわせてご参照いただきたい。